

回 顧

藤 江 正

昭和 28 年に北海道中標津高等学校教諭を振り出しに北海道小樽桜陽高等学校と 12 年間にわたり高校教育に携り、小樽商科大学には昭和 40 年に赴任して以来 28 年になるが、平成 5 年 3 月末をもって定年に達し、40 年間にわたる教員生活を一応終わることになりました。ひと口に 40 年といっても一瞬の間に過ぎたような気もするが、その間の大学紛争や怪我の後遺症に悩まされた時期のことを考えると随分と長かったようにも思われる。

私の中学時代とその以降は第 2 次世界大戦の最中と戦後の混乱期に遭遇し、食糧増産とか戦力増強の名のもとに援農作業や森林の伐採・搬出作業に駆り出され、学校での授業は殆んど実施されなかったが、中でも特に重視されたのが軍事教練と柔道、剣道であった。また体力増強策として体力章検定が実施され、上級バッチ獲得のための競い合いも激しく行われた。

中学 2 年の時、突然、学校側の命令で全校生徒 500 名の中から 3 名が 1 カ月間のグライダー訓練に参加することになった(北見市)。多分、特攻隊要員としての目的であったと思われる。更に 1 次訓練を終えた者の中から 20 名が 2 次訓練に指名され、不幸にも再度参加することとなり美幌農業学校(現女満別空港近辺)に宿泊しての訓練が始まった。1 次訓練では平地からの滑走が主であったが、2 次訓練では 100 m 位の山上からの飛行で滞空時間も長く旋回操作も自由にでき快適なものであった。搭乗回数は 135 回にも及んだが、ここで教えられたことは「失敗は死」につながる。ということであった。1 カ月後に学校に戻り、居残りの生徒を対象にグライダー訓練の助手役を務めることになり援農作業等は免除された。しかし、あと 1 カ月も戦争が長引けば現在の私は無かったと思うと感慨一入である。

戦後は6・3・3・4の学制改革にともない同じ学年でも中学5年で卒業する者と新制高校3年に残る者があった。教科面では英語の時間数が大幅に増加し、柔・剣道科目が廃止となり、体育授業の教材としてスポーツ種目が多く取り入れられるようになったのが大きな変化である。

私は貧乏の子沢山といわれる家庭に育ち、小さい頃から店の仕事や家事の手伝いをさせられ、外井戸から釣瓶で水を汲み、天秤棒を担いでの水運びなど足元の滑る冬期間では転んで水をかぶることもあった。更に薪切り、薪割りなど、当時の日常生活や作業形態が私達の身体作りや体力作りに役立っていたことを今になって痛切に感じている。中学入学後は体力にも自身があったことから格技（柔道、相撲）に興味をもつようになった。幸い入学した中学校に柔道6段の教師がいて大変厳しい指導を受けたが、その説得力のある指導と人柄に触れ、教師への志望もこの先生の影響が大きかったと思っている。

昭和23年4月に日本体育専門学校に進学したが、当時は日本全国どこでも同じような境遇の学校が多かったことと思うが、日体も戦争の被害を蒙り、茨城県土浦市（霞ヶ浦の予科練跡）に疎開中で教育環境は極めて悪く、とくに運動する者にとって食糧不足は何よりの苦痛であった。入学はしたものの希望と現実のギャップに悩み苦しんだこともあった。この頃、部屋の友人に誘われてラグビーの試合を観に行き、肉弾相打つコンタクト・プレーや華麗なボックス・プレーにすっかり魅了された。その後、1年間は相撲の大会出場を認めてもらうことでラグビー部に入部することになった。相撲では関東大学優秀8校に選ばれ、東西大会への出場や国技館の土俵で相撲がとれたことも懐しい思い出である。ラグビーに魅力を感じた第1の理由は、「ラグビーは精神を重んずる競技」である。という点で、とくに他のスポーツに見られない特徴として「ノーサイドの精神」がある。試合中どんな激しく闘い合っても試合終了の笛が鳴れば敵も味方もなくラグーマンとしての友情で心が結ばれ、ひとつの風呂に両チームの選手やレフリーも共に入り、お互いの健闘を称え合い、談笑しあう様子は他のスポーツでは絶対に見られない光景であ

る。第2の理由は、「自主性を重んずる競技」である。という点である。スポーツの中には選手の一挙手一投足にいたるまで監督の指示やサインによって行動する競技もあるが、ラグビーの場合はキャプテンがチームの指揮者として練習計画を立て、チームをまとめ統率する。では監督の役割は何かというと、選手に正しいプレーを教え、いかなる戦況にあってもキャプテンを中心に団結し、常に普段の力を充分に発揮できるよう日々の練習でチームを育成し、コンディションの調整を計っておくことである。このような素晴らしい「友情と信頼」で結ばれるラグビーというスポーツに出合ったことを幸運に思っている。しかもラグビー競技を通じて逞しい意志とか困難に立向かう冒険心と勇気といったものを体験し、互いに助け合い（サポート・プレー）、邁げまし合う「心」を学ぶことができたことは体育指導者として重要な知性的行動を知るための良い経験であったと思っている。

小樽商大では保健体育授業やクラブ学生との接触の中で様々な思い出も多く忘れ難い28年間であった。体育施設では現在の第一体育館が完成したのが私の赴任した昭和40年で、新しい体育館で授業できたことを好運と思っている。しかし、これが既存のグラウンド跡に新設したため屋外グラウンドのない不自由を強いられることになった。5年後にやっとグラウンド（現野球場）は完成したが、これもまた、スキー場の斜面を削って作ったものでスキー場としての面積が3分の1程度になってしまった。グラウンド完成後もひとつの場所を体育実技で使用する一方、課外時には硬・準硬式野球、ラグビー等のクラブが共用する形となり、時間配分などの調整を行いながらの使用であったため、狭隘化と危険防止の点から第2グラウンドの建設を大学当局に強く要望し続けた結果、昭和53年に山上グラウンドの拡張・整備がなされ事故等の危険性も一応は解消された。その後、屋内プール、第2体育館の新設など一通りの体育施設も整備され、また保健体育科のスタッフにも恵まれ、嬉しく充実した28年間を送れたことを心から感謝している。

昭和59年度より平成3年度までの連続8年間にわたって開催してきた小樽商科大学（スキー）公開講座は、「安全で楽しく、一日も早く上手に滑れる

ための技術指導」という目標のもとに、中川喜直先生をはじめ所管事務職員や基礎スキー部員の協力を得て実施してきた。滑りの良否、上達の度合いなどを自分の目で確かめるためのビデオ等も利用し、更に講座終了にあたっては各自の課題についてもアドバイスをを行い、受講者より大変な好評を得たことも懐かしい思い出となっている。

教員生活 40 年を回顧して、小樽商科大学における 28 年は私の生涯で最も長く在任した職場であり、その間、北海道地区大学体育大会等の学校行事にあたっては所管事務官を始め、多くの教官のご協力をいただき、また本学には多種多様な面で有形無形の恩恵を蒙り深く感謝している。保健体育という教科の性格上、教授者として学生に接してきた面が多く、業績についても今になって見直すと不満の残るものもあるが、学校体育や社会体育の立場から現場に密着した実戦的で有効なものをと心掛けてきたつもりである。

このたびは身にあまる名誉教授の称号を受けた上に記念論文集まで出して戴くことになり、このご配慮に対し心から感謝申し上げますと共に人文研究関係の編集委員並びに本号執筆の諸先生に心からお礼を申し上げます。

最後に、小樽商科大学の益々の発展をお祈り申し上げます。摺筆する。